

圖版要項

一 法華堂根本曼荼羅 全圖 (原色版) 米國 ボストン美術館藏

麻布著色額装 竪一〇七糎 (三尺五寸三分五厘)

横一四三・八糎 (四尺七寸五分)

—— 矢代幸雄「法華堂根本曼荼羅の回想」参照 ——

二・三 法華堂根本曼荼羅 部分 (赤外線寫眞) 同 藏

表題の曼荼羅については諸先學の詳細な研究により既に多くのことが明かとなったが、蒼古と評せられている、中尊並びに兩脇侍等の背景をなす山水の圖柄は明瞭に認め難いままいささか行きづまりの状況にあつた。筆者は一九五六年秋ボストン美術館を訪れた際、東京國立文化財研究所の依頼により右曼荼羅中の山水圖の赤外線寫眞の撮影を請うたのであつた。幸い同館東洋部長富田幸次郎氏の特別の取計により、同館保存部主任ヤング氏の撮影されたものが、ここに紹介する寫眞であり、見られる通り豫期以上の好結果を收め得た。

なお、右寫眞撮影後の極めて短時間の餘裕を利用して筆者は本曼荼羅の左半分を水銀燈の紫外線下に検査し得たが、下地の布は紫外線により發光せず、從つて絹ではなく麻布であるとの從來の見解と一致した。又左上部の雲、建物、天蓋、中尊、脇侍菩薩等の白色部分は白色の螢光を呈した。これはこれらの部分に後世、補修の手が及んでいることを示すものである。

以上赤外線寫眞の掲載に當り、撮影の事情を述べ、ボストン美術館の富田、ヤング兩氏の格別の好意に對し深甚の謝意を表する次第である。(山崎一雄)

附記 この寫眞はボストン美術館藏版ですから、同館の許可なくして轉載されないよう御注意申し上げます。(編輯係)

圖版要項

四 聖觀音菩薩像

滋賀 常教寺 藏

木造著色

像高 九二・七糎 (三尺六分)

琵琶湖をいだいた滋賀縣地方は、周知のように七世紀には、天智天皇が近江大津宮を造營したところであり、八世紀に入つては、一時的ではあるが、聖武天皇の紫香樂宮がつくられ、良辨僧正の造營した石山寺があり、また、九世紀には、比叡山と近接するその位置から、早くより天台宗が流布し、佛教文化史上、重要な位置をしめる土地である。ここに紹介する常教寺の聖觀音立像も、また、こうした古き佛教文化を物語る一遺品であらう。

今日、この像を伝える常教寺は、叡山の眞東、山を下つて、琵琶湖を渡ればその對岸にあたる栗太郡常盤村字下寺にある。この像は、本來、聖德太子の開創と伝えられる芦浦觀音寺の下寺にあつたもので、傳教大師の時、天台宗となり、普門山金胎坊と稱し、比叡三千坊の一つであつたという。それが、元龜二年(一五七二)の兵火にあい、以來荒廢をつづけ、この後、村有となつていたが、明治になつてから、常教寺に附屬したものと伝えられている。

聖觀音像は、今日、二重の蓮華座に金色の舟形光背を背負つて立つているが光背は、明治のもの、臺座は、やや古いが、無論、像と一緒にしたものではない。その法量は、次の通りである。

像高九二・七糎	髮際よりの像高八四・八糎
頭長一八・五糎	面長一一・四糎
兩耳間隔幅 一一・八糎	面奥一三・六糎
肩幅 二三・七糎	胸厚 一四・二糎
胸厚(天衣を含む) 一四糎	臂張 二七・五糎

像は、頭部、體軀の基本部をヒノキ材の一木彫で刻み、兩腕、兩足先、天衣、腕釧等は、別木である。また、白毫、兩手先、前膊の飾り、兩足は後補である